

教師のアセスメントと児童生徒による自己評価

○伊藤 美奈子 (奈良女子大学)

キーワード: 教師, アセスメント, 児童・生徒

目的

学校におけるアセスメントは、従来、担任教師の観察力や直感によるところが大きかった。現在、教育現場で広く使われているQUやアセスは学校での適応状況を調べるために大いに有効である。一方、子どもたちの心の問題の背景には、家庭の要因やパーソナリティ、自己肯定感や生きる意欲など、多様な要因が絡んでいる。本研究では、それら多次元から児童生徒をとらえる奈良県版アセスメント尺度とともに、担任教師に対し「気になる児童生徒」をチェックリストで回答するよう求めた。そこで抽出された児童生徒自身の回答結果を分析することで、教師により「いじめられている」「反抗暴力が気になる」「親子関係に歪みがある」という見立てを受けた子ども自身のプロフィールを検討するとともに、小学生と中・高校生による違いを検討する。

方法

調査時期: 2017年7~11月。

調査対象: 小学14校, 中学15校, 高校18校に在籍する小学生1088人, 中学生4051人, 高校生5728人を対象とした。

調査内容: 子ども対象=奈良県版アセスメントシート児童用42項目・生徒用70項目(伊藤ら, 2017), 教師対象=気になる子どものチェックリストシート。

利益相反開示: 発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

倫理的配慮: 質問紙の内容について教育委員会の承認を受けた上で、調査を希望する学校を対象に行った。調査対象校とは綿密な打ち合わせを行い、配慮が必要な生徒には実施しない等の配慮を依頼した。また実施時には「個人が特定されることはない」「途中で回答をやめることができる」等の配慮事項を調査の表紙に記入し、担当教員からも説明を行った。

結果と考察

教師が「いじめ被害を受けている」と認知している小学生50人・中学生334人は(Figure1), 全体的に得点が低く、<いじめなし>は小学生・中学生ともに低い。さらに、小学生はいじめそのものだけでなくレジリエンスの低さや情緒不安定という特徴もうかがえる一方、中学生になると、自己肯定感の低下が顕著になることが示唆された。

次に、「反抗暴力が気になる」とチェックした小学生35人・中学生245人のプロフィールをFigure2に示した。共通した特徴として<教師との関係>が悪い。一方、小学生では<レジリエンス><コミュニケーション><情緒安定>などは平均より高いが、中・高校生になると、<学力>についての評価が低下し、情緒も不安定になる傾向がうかがえた。

教師から見た「親子関係に歪みのある子」は(Figure3), 小学生68人・中学生300人とも全体に得点は低い、とくに<家庭の居心地>は低い。さらに中学生では、<家庭での居心地>に加え、<生きる意欲><自己評価・受容><学力>の低さが顕著であった。

以上より、教師によるアセスメントがほぼ妥当であることが確認されたと同時に、小学生と中学生では、「問題の見え方・表し方」の違いがあることも示唆された。

FIGURE1 「いじめ被害の子」のプロフィール

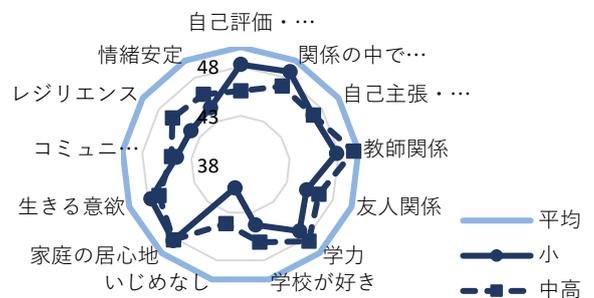


FIGURE2 「反抗暴力が気になる子」のプロフィール

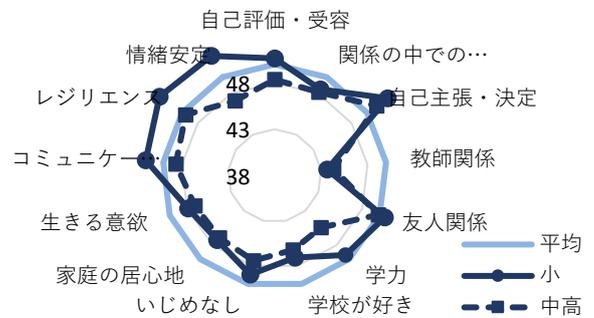
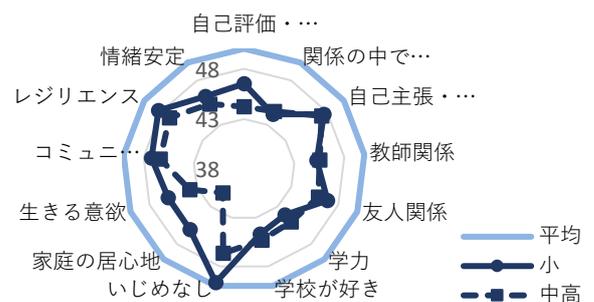


FIGURE3 「親子関係に歪みがある子」のプロフィール



(ITO Minako)